

文章をみがく

早稲田大学教授

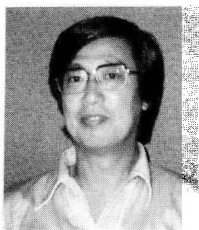
中村 明 *Akira Nakamura*



76

NHK BOOKS

616]



中村 明——なかむら・あきら

●1935年山形県鶴岡市に生まれる

早稲田大学大学院修了

文体論専攻

現在、早稲田大学教授

●著書『比喩表現の理論と分類』国立国語研究所報告 57 (秀英出版)

『作家の文体』(筑摩書房)

『比喩表現辞典』(角川書店)

『名文』(筑摩書房)

『感情表現辞典』(六興出版)

『日本語レトリックの体系』(岩波書店) ほか

NHK ブックス [616]

文章をみがく

平成3年2月20日第1刷発行

〈検印廃止〉

著者 中村 明

発行 日本放送出版協会

東京都渋谷区宇田川町 41-1 郵便番号 150

振替東京 1-49701

[印刷] 精興社 [製本] 豊文社 [装幀] 倉田明典

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

ISBN4-14-001616-7 C1381

みがく

早稲田大学教授

中村 明 *Akira Nakamura*

76

NHK BOOKS

[616]

© 1991 Akira Nakamura

Printed in Japan

〔編集協力〕 原田佳一・瀬谷直子

はじめに

文章作法書の刊行はあとを絶たない。最近は何年に三十冊のペースだとも聞く。ただ「文章」というそつけないものから「たちまちうまくなる文章模倣術」「必勝の文章戦略」「よくない文章ドク本」と名のるものまで、蝸牛型のわが家の書庫に並んでいるだけでも何百冊かになるだろう。

この書名が案外ばかにならない。たとえば、単に「文章読本」と題する本には小説家が独自の文章観を披瀝したものが多し。評論家・随筆家・ジャーナリストが書く「文章作法」となり、内容も文学以外の例が増えて一般論をめざす傾向がある。「文章表現法」と銘うつものには複数の大学教授の講義ノートに文章資料を添えた堅い本が目だつ。「作り方」「書き方」を書名にかかげる本は、一般的な注意のほか、感想文・小論文・レポートといったジャンル別の説明を含むことが多いようだ。また、「技術」や「上達法」を表に出す本は、やはり具体的なテクニックにふれる記述が多く、「入門」となると、初心者向けの手ほどきという感じが強くなる。

どんな本が役立つかは、むろん目的によって違う。仕方なしに書かされ、なんとかつじつまをあわせないと損をしたり恥をかいしたりする文章と、折にふれての手紙やエッセイ、時にはフィクションまじりの小品など、自分から進んで書く文章とを分けて考えなければならぬ。公文書が会話調で生なましく書いてあっては読むほうがとまどうし、契約書に感動をこめたりするとあとで厄介なことにもなりかねない。基本姿勢さえ違う両者では別の種類の本が役立つからだ。

前者の課せられる文章に上達するためには、文章のジャンル別に書かれた作法書と、誤りやすい点を分類・整理した悪文矯正の本が参考になる。後者の自発的な文章で腕を上げるためにも時には

有効だが、そういう型や瑕瑾にとらわれすぎると、のびのびした個性的な味わいを失う。無難な文章より美と力にみちた作品に向かう者には別の参考書が必要だ。

伸びる基礎として、表現を豊かにし最適の文章に近づける広い意味でのレトリックを修めたい。珠玉の詞が考えるヒントを与え、書くバネとなることが少なくないので、テーマやトピック別に整理した表現集をばらばらめくってみるのもよい。それから、名文鑑賞の本を一読するのも有効だろう。ただし、名文の例を並べただけのいわゆる文範や、「人物が生き生きと描かれている」とか「自然描写が舌をまくうまさだ」とかいった説明で済ませる高度な本は、文章がうまくなってから読むと効果がある。文章作法書を必要とする段階では、その表現のすばらしさをことばに即して具体的に分析した本で文章感覚をきたえたい。そして、もうひとつ、新鮮なひらめき、光る提言を盛った数冊の文章読本に接することを奨める。「あるがままに書くのはやめよう」という清水幾太郎の卓見、「ちよつと気どつて書け」という丸谷才一の勇氣ある提言に、ようやくふっきれた思いのしたプロの書き手もあつたはずだ。文章関係の自分の著書・編著をこの線に沿って位置づけてみると、『比喩表現の理論と分類』（国立国語研究所報告57・秀英出版）『日本語のレトリック』（筑摩書房）、近刊『日本語レトリックの体系——文体のなかにある表現技法のひろがり』（岩波書店）はレトリックの分野であり、『比喩表現辞典』（角川書店）『感情表現辞典』（六興出版）は表現例集成の色彩が強い。また、『名文』（筑摩書房）はまさに名文解析の試みであり、『作家の文体』（筑摩書房）『表現のスタイル』（筑摩書房）もそれに関連する。

それでは、『文章をみがく』と題したこの本はどうか。原稿用紙の使い方から始め、用字用語、句読点の打ち方……と進む「入門」や「書き方」類とは違う。私が大学教授の威厳と縁遠いよう

に、この本も「表現法」といつたいかめしい本ではない。高らかに「技術」を謳う文章テクニクスのハウツーものとも違う。言語表現と伝達効果とのかかわりを説明するために可能な限り具体的な分析を心がけたが、個々の技法の伝授というより、それらの奥にある一般ルールをさぐりあて、表現のここをとらえたいと思った。これまで文章表現について考えてきたことを「書く」という立場からまとめた、いわば総集編であり、研究成果の上に立った私なりの「ひとつの文章読本」とも言うべき性格の本である。

この世に生まれ、生き、感じ、考えた自分を書きのこしたいという内面の欲求につきあげられて筆を執る者が、その時どきに行きあたる文章表現上の諸問題を、できるだけ体系的にとりあげようと努めた。晴れた日に公園の芝生に寝ころがって、好きなページを開くもよし、街角のファスト・フードの店の小さな椅子で、雨もよいの空を眺めながら考えるもよし、立ちのぼる珈琲の湯気を透かして、気の合った仲間と論じ合うもよし。書齋や教室でむずかしい顔をして読んでいるときには気づかなかつたヒントが、案外そんなときにひよっこり浮かんできたりする。文章作法の書をはじめて手にされた方も、文章読本をすでに何冊もお読みになった方も、この本を気楽に眺めているうちに、書くために考えるコツのようなものをつかんでいただけではないか。

また、眺めているうちに気持ちのなかで次第に熟してくるものがあり、わけもなく書きたくなるかもしれない。無我夢中で書いていくうちにいつか、文章がうまいかへたかというようなことが気にならなくなる。表現の勘というものはそういうふうに養われていくほかはない。

むろん私のせいではなく引用文の力によってだが、この本が、書かずにいられない気持ちに誘う文章読本最高の使命をはたすことを願って、一風呂浴びて来よう。今夜はワインになりそうだ。

〔目次〕

はじめに 3

I

- 1 いい文章の基本 9
- 2 よき書き手となるには 16
- 3 語感をしなやかに 24

II

- 4 文章構成のタイプ 30
- 5 手紙のかたちとところ 34
- 6 書きだす 40
- 7 結ぶ 53

III

- 8 発想がひかる 74
- 9 視点のはたらき 80

10 散文のリズム 92

IV

11 心理を描く 103

12 人物を描く 109

13 自然を描く 115

V

14 レトリックのすすめ

15 比喻表現のいろいろ

16 省略効果のさまざま

17 否定表現の効果 149

VI

18 古風さの正体 157

19 深みを出すには 169

20 表現のへ間へ 177

21 余情をさそう 187

143 132 124

VII

	25	24	23	22
あ	文体を味わう(4)	文体を味わう(3)	文体を味わう(2)	文体を味わう(1)
と	—	—	—	—
が	ヒューマ	風情	浅酌微吟	はにかみ
き	—	221	210	201
	238			

あ

と

が

き

1 いい文章の基本



いい文章とはなにか。今こう自問し、しばらく自答できないでいる。「いい」とはどういうことをしるる前に、「文章」というもののイメージが固まってこないのだ。

文章のひろがり

「1」ボクが、パパよりもものっぽになったら、ママはなんていうかしら……。パパがボクをおぶって、せいが立つギリギリいっぱいのおかいところまで、ボクをつれてくれたみたいに、こんどは、ボクがパパをおぶって、海から海岸のほうを、見せてやろうかな……。海から見た海岸は、きれいだったな……。おおぜいの人たちがよろこんでいる世界って、たのしいな……。

——平塚武二「パパはのっぽで　ボクはちび」

「2」ある婦人が、フランスの大作家、ヂュマ・ペールにたずねた。

「先生！ 友情と恋愛のちがいは何でしょうか？」

ヂュマは、しばらく考えていたが、

「それは、昼と夜とのちがいですな！」

——田辺貞之助「ふらんす小咄大観」

「3」光輝ある三千年の歴史を有する帝国の運命盛衰は繋りて吾一人にある。親愛する七千万同胞の榮辱興亡は預かりて吾一身にある。余は此の森嚴なる責任感と崇高なる真面目とを以て勇往する。余は進取、積極、放胆、活発、偉大の精神意気を以て驀進する。世態人情の趨向は余に

此の決意を一層鞏固ならしめたり。

—— 宇垣一成の日記

[4] 批評は小説を切りきざんで分析したりしちやいけない、まずどつぷりと思う存分、詩的経験に身を浸しなさい、味わいなさいって言ってるの。あれえつ。この言いかた、日本の批評家の誰かさんの言い方に似てませんかあ。そうそうそ。小林さんちの秀雄ちゃんです。

—— 筒井康隆「文学部唯野教授」

[5] 参考図2の白1と逆から捨てる。しかし、これは黒2と守られて、いかにも隅が大きい。局後の感想に加わった小林名人も、隅の黒白二子ずつを取り除いてみせ、「大きすぎるね」。

—— 朝日新聞 一九九〇年七月七日朝刊

[6] ここに君とも、まことに君とも、生と死とに別れる時に遭つた。君を敬慕し哀惜する人々は、君のなきがらを前にして、僕に長生きせよと言ふ。これも君が情愛の声と僕の骨に沁みる。国破れてこのかた一入木枯にさらされる僕の骨は、君といふ支へさへ奪はれて、寒天に碎けるやうである。

—— 川端康成「横光利一弔辞」

[7] 赤い日よけに金色のFの文字が鮮やかなフーケ。シャンゼリゼ通りに面したこのカフェは、イングリッド・バーグマンとシャルル・ボワイエが共演した映画「凱旋門」に登場したことでも有名だ。キャプシューヌ通りのカフェ・ド・ラペは、オペラ座オテル・グラン前にあり、若き日のナポレオンが出入りしていたこともあって、政治論議を闘わせる場となっていた。

—— 『マイ・パスポートヘヨーロッパ』

[8] 「ばかだな、こいつは……行きたおれになつたつてことに気がついてねえんだな……おう、おめえはな、ゆうべ浅草でな……死んでるよ」

「おい、よせやい。気味のわるいことをいうな。おれが死んでるなんて……だって兄貴の前だけれど、おれはちっとも死んだような気がしねえぜ」

「それがおめえはずうずうしいっていうんだよ。はじめて死んだのに、どんな気がするか、そうそうすぐにわかるものか」
 —落語「粗忽長屋」

世の中にはまだまだいろいろな文章があるにちがいない。

森鷗外「阿部一族」……「古今和歌集」仮名序……ウイスキーの広告文……町会の議事録……計量経済学の論文……暑中見舞のはがき……「好色一代男」……少女漫画の吹き出し……教育原理のノート……「善の研究」……ワープロの取扱説明書……フランスの刑法の条文……「犬の飼い方」……新聞のテレビ欄の解説……物理学の受験参考書……都々逸の文句……「ハムレット」……医者の診断書……五箇条の御誓文……駅の伝言板……「風姿花伝」……イソップ物語……詫び状……結婚式の祝電……「出雲風土記」……「荻窪風土記」……不動産売買契約書……スポーツ雑誌の記事……国語辞典の凡例……候文の恋文……「それから」……

条件

はてしなく広がる多様な文章群を眺めながら、いい文章の一般的な条件をさぐりとうとうとして、しばし途方にくれる。世の中には多種多様な文章がある。いい文章の姿も当然一様ではない。いい文章にもいろいろある。そこから話を始めなければならぬ。条件の違いに対応したそれぞれの書き方というものがあるのではないか。

もっとも基本的なところから検討を始めれば、まず何語で書くかという問題がある。一般に、何語で書くかをきめると、それにふさわしい発想や表現がある程度まで否応なくきまってくる。無意

識のうちに日本語を選ぶとき、日本語の語彙を用い、日本語の文法に従うのは当然だが、同時に、たとえば、視点がゆれやすく、非限定表現や間接表現や省略表現などが好んで用いられるという、文章における基本的な表現軸を、ごく自然に選びとっているのである。その性格を避けて書くと、意図的であるという表現価値が生ずる。

つぎは文章を書く目的の違いである。何のために書くかということ抜きにして、どんな文章がいいかという問題を考えても意味がない。新聞記事は社会的な事実の報道を目的として書かれるが、事件が泥棒や殺人犯の側から伝えられることはない。報道文章といえども、情報が伝わるだけでは不十分で、社会正義を育て、時には社会連念の改革を迫るなど、その奥に一つの主張がひそんでいるからだろう。したがって、表現意図や読者の期待と伝達効果との関係を抜きにして、文章の「いい」「わるい」という評価は出てこない。あるひとつの文章がジャンルを超えて成功できないのは、その表現に託すねらい、読み手の期待が、ジャンルごとに違うからだ。名作とされる谷崎潤一郎の『細雪』中の圧巻、あの洪水の場面の描写も、それを新聞の社会面の記事として評価すれば惨憺たる結果になるだろう。素粒子研究の学術書が『太平記』なみの流麗調でたゆたうように論述されては困るし、童話が六法全書の文面とまちがわれたり、朝顔の観察記録が人形浄瑠璃「朝顔日記」の調子で展開したりしても困る。

どの文章も、それぞれの目的をどこまで達成できたかという基準で、評価が決まる。一睡もせず
に精魂をこめて書いたラブレターを相手がかことのほか高く評価し、これはもう立派な文学作品の域に達していると手ばなしでほめてくれても、とうてい満足できる成果をあげたとは言いがたい。

文章の効果は誰かに読まれるまで厳密にはわからない。森鷗外の『空車』むなぐるまが随筆中の佳編として

通るのは知的階層の成人を読者対象とするからだ。ある人に好感をもたれるいい手紙が、同時に、別の人を不快にするわるい手紙であったりするのは、言語作品の効果がその受け手によって左右されるからである。

さらに、状況や環境によっても表現効果は大きく変わる。新聞紙上に掲載される広告にしても、計報欄と隣あわせの薬や結婚式場の広告、あるいは、事故による大惨事を伝える記事の近くにある新車や海外旅行の広告などは、むしろ出さないほうがいい宣伝になりそうだ。

同じことばが人を喜ばせたり、勇気づけたり、悲しませたり、怒らせたりするのは、文章の表現効果というものが広い意味での状況と深くかわることを示す。手紙でも相手のおかれた状況、その心理状態によっては、話題にふれず、そうっとしておいてやること^が、どんな慰めのことばにもまして、相手をいたわる効果をあげたりもする。どんなへたくそな手紙でも、書き手のそういうやさしさが相手に届くなら、もう何を言うことがあるだろう。

以上のように、「いい文章」の具体的な姿は、ジャンルなり相手なり状況なりに応じてさまざまなかたちをとる。そういつた諸条件にきちんと対応できている言語作品ほど表現効果の高い文章だと言える。もう一步進めて、そういつたきめ細かな対応に気づかう「いい文章」の底にあるものを問うなら、それは読む人に対するいたわりの心、やさしさであると言いうことができるだろう。

正確さ

幾百もの文章作法の書がゴム印のようにくりかえず、いい文章の条件、「正確さ」と「わかりやすさ」というのも、読む側の負担を軽くする心くばりと通いあう。ちよつとした論文や批評や随筆のような日常一般の書きものでは、それなりの内容がありさえすれば、そういう正確でわかりやす

い文章がやはりいちばんいいと、ここでもその平凡で力強い一事をくりかえしておきたい。

それでは、文章の正確さとは何か。「日が西に傾く」と「地軸が何度回転した」とはどちらが正確な表現なのだろう。科学的真理・論理的思考を基軸とする文章ではむしろ後者のほうだが、経験的事実を軸とする文章ではむしろ前者のほうが良い。言語表現は人間の認識を基盤とし、地球の自転は感覚的事実ではないからだ。

わかりやすさと思いやり

どういうレベルの正確さを追うどのような種類の正確な文章でも、いい文章というものは、正確さを保ちつつも、そのためにわかりにくい表現になることを極力避ける。どれほど正確に記述してあっても、それが伝わらなければ「正確な文章」であることがほとんど意味をもたないからだ。

いい文章は身勝手な文章であってはならない。それは書き手個人の所有物ではなく、いい読み手を得てはじめて真価を発揮するのだから。いい文章を支える思いやり、コミュニケーションにおけるやさしさとは、エゴを抑えきるきびしさではなからうか。

それでは、わかりやすい文章とはなにか。それは必ずしも、小学生でも知っている日常のことばだけの並んだ文章を意味しない。使用語彙が生活上で出現頻度の高いことばの集合であるかどうかということより、対象を的確に指示し、書き手の感情を過不足なく運び、相手や状況に応じて文体的レベルを適正にスイッチさせる、そういうすべての面で、そこにふさわしい用語が選択されていることが、わかりやすい文章の言語的な基礎をなすと考えられる。

つぎに、一文を構成する個々の語のつながりが曖昧にならず、文全体としてできるだけ一つの意味になるようにすべきだろう。多義的な文は読み手に負担をかけるからだ。さらに、そうしてでき

あがる一文一文の展開する全体としてのつながりも明晰であることが必要である。

作品がわかるためには、その言語表現がどのような現実や観念やを指し示すかが理解できただけでは足りない。それがどういう表現意図をもって書かれたかを把握する必要がある。作品が読めたとほんとに言えるのは、言語的に実現した軌跡をとおして、それを表現した人間行動自体の意味がとらえられたときなのだ。真にわかりやすい文章というのは、むしろそこに書かれなかったこと、いわばことばの背後にあるものが、読み手にすつきりと伝わる文章だ、と見ることもできるだろう。

できればもう一つ、広い意味での「おもしろさ」をいい文章の条件に加えたい。文章のよさを引き出し、すぐれたコミュニケーションを完成させてくれるよき読者への感謝としても。

文章にはまだ奥がある。深い味わい、芸術的なおくり、人と作品の円みのようなあたりまで思い描くならば、読むことがそのまま悦びであり、新しい発見であるような文章がある。ありふれた身辺雑記の陰翳が思いもかけずさわやかな共感を喚ぶ。執筆時の充実した心の波たちが、読む者の気持ちを熱くする文章がある。笑って読んでいるうちに、いつか作者と一体になっていることに気づく、滋味掬すべき文章がある。そういうヒューマーから先は、名文論としてこの本の最後にふれることになるだろう。

いい文章の基本——それは人のふれあいのなかでさりげなく見せるやさしさ、ちよつと恥ずかしいが、そう言ってみたいような気がする。